氏　　名	ペレイラ吉田ジオゴえいじ
学 位 の 種 類	博士（国際公共政策）
学 位 記 番 号	博　甲　第　10516　号
学位授与年月日	令和　4　年　9　月　22　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	The Role of Non-governmental Organizations in the Psychological and Sociocultural Adaptation of Brazilian Immigrants in the United States and Japan （米国と日本におけるブラジル移民の心理的・社会文化的適応における非政府組織の役割）

主　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	関根　久雄
副　　査	筑波大学　教　授	Ph.D. (Economics)	箕輪　真理
副　　査	筑波大学　准教授	博士（文学）	鈴木　伸隆

論　文　の　要　旨

本論文は、アメリカおよび日本に居住するブラジル移民のホスト社会への適応過程における非政府組織（以下、NGO）の役割を明らかにすることを目的としている。特に本論文では、ホスト社会への適応を「心理的適応(psychological adaptation)」と「社会文化的適応(sociocultural adaptation)」に分類した上で、それらを考察のための分析軸として用いている点に特徴がある。ここでいう心理的適応とは個人の主観に起因する現象である。それは移民がホスト社会への移行と定住の過程で到達した幸福（well-being）と自己満足（self-satisfaction）の程度によってもたらされるものであり、ホスト社会の文化的文脈に対する感情的反応のことである。一方社会文化的適応は、移民が新しい生活環境に対処する能力のことである。換言すれば、移民が日々の困難な状況を軽減するために体得したスキルの程度のことである。それは、ホスト社会の文化的文脈への同化や現地語の熟達を単純に意味するのではなく、移民一人一人のニーズに比例したスキルを内面化することを指している。本論文において著者は、文献研究および著者自身による日本とアメリカにおけるフィールドワークで得たブラジル移民の生活実態や彼らを支援する NGO の実践活動に関する一次データについて、適応に影響を与える諸要素を変数(variables)として指摘した上で、日本とアメリカそれぞれのホスト社会に適応するための中核的変数を抽出して議論を展開している。また、ホスト社会において周辺的状況下にある移民の現実に対し、本論文は NGO 活動を手がかりに、彼らの脱周辺への道をさぐることを指向している。

本論文は全体で次の 7 章で構成されている。

Chapter 1　Introduction

Chapter 2　Research Background

Chapter 3　Theoretical Background

Chapter 4　Sociocultural and Psychological Adaptation of Brazilian Immigrants and the Role of Non-governmental Organizations

Chapter 5　Case Studies of Non-governmental Organizations in the United States and Japan

Chapter 6　Discussion

Chapter 7　Conclusion

Chapter 1 では、本論文の研究テーマと分析枠組み、研究の方法、研究の意義、および移民のホスト社会への適応を支援する NGO の貢献に関する先行研究のレビューを行うとともに、ブラジル人が海外への移住に向かう社会的・経済的背景や移住に関連する数多の苦難や、移民を支援する NGO などについての一般状況についても言及している。

Chapter 2 では、1980 年代から 90 年代にかけて、ブラジル人が経済的苦境下にあった同国を離れ、高収入の職を求めて海外へ移住するに至った歴史的背景について述べるとともに、本研究の具体的な検討対象となるアメリカと日本のブラジル移民コミュニティを取り上げ、その歴史的および今日的実態について人口動態、社会的特性、労働特性、将来の目標などの側面から概観している。アメリカにおけるブラジル移民の多くは観光ビザで入国後に不法滞在化したり、メキシコ国境から密入国したりするなど違法性を伴うのに対し、来日するブラジル人は日系人であるために長期滞在ビザを取得することができる「正規の」滞在者としての地位を確保できる点で異なる特徴をもつという。しかし、アメリカ、日本ともにブラジル移民は脆弱な雇用基盤であるがゆえに未熟練労働などに就かざるを得ず、彼らの厳しい生活実態についても本章で具体的に述べられている。

Chapter 3 は、著者が分析的枠組みとして設定した心理的適応と社会文化的適応に関する先行研究を渉猟した上で、それらの本論文への適用可能性について論述した章である。著者は、移民がホスト社会での日常生活に適応するための能力を社会文化的適応とし、移民がホスト社会に定住する際の幸福度や個人的満足度に関する個人的感情を心理的適応と位置づけるとともに、これら 2 つの適応に影響を与える変数の存在を指摘している。著者は社会文化的適応に影響を与える重要な変数として、新しい生活環境での居住期間、移民の法的地位、差別の認知、食料品の購入やバスに乗るなど日常生活を送る際に必要な「スキル」の習得度を挙げる。他方、心理的適応はストレスを導く状況に対処する能力であり、外国人に対する恐れ、不法滞在、職業上の地位の低下など、安全で安定した環境で生活しているという感覚に関連した事柄を変数として指摘する。

Chapter 4 は、日本とアメリカに滞在するブラジル移民の心理的適応と社会文化的適応の過程をサポートする NGO の役割の考察に資する先行研究をレビューした章である。まず、NGO 概念を一般的レベルで明示した上で NGO の支援活動が適応の結果に与えた影響について考察している。その考察を踏まえて著者は、アメリカと日本のブラジル移民の事例に焦点をあて、彼らの心理的適応と社会文化的適応に影響を与える主要な変数を特定した。さらに、NGO が移民に対して行う支援活動の役割について考察を行っている。

Chapter5 では、著者が 2019 年 8 月から 2022 年 1 月にかけて、東京都、神奈川県、愛知県、およびアメリカ・マサチューセッツ州において実施したブラジル移民を支援する 8 つの NGO や在外公館、現地行政機関、教会などに対する実地調査（観察、インタビュー、資料収集など）から得られたデータを用いて、ブラジル移民を支援する活動の実情を詳細に記述している。特に、NGO 活動における心理、教育、社会統合、医療ケア・基本的ニーズ充足、労働者保護、入国管理の側面に焦点をあて、日米両社会におけるブラジル人コミュニティの適応に必要なスキルの獲得に影響を与える変数について明らかにしている。

Chapter6 では、前章までのデータ提示と考察をふまえ、NGO の支援活動がアメリカと日本におけるブラジル移民に対する心理的適応および社会文化的適応の結果に与える影響について検討している。著者は、NGO はブラジル移民と受け入れ国政府、ブラジル在外公館、ホスト社会などのアクターをつなぐ橋渡し的あるいはファシリテーター的役割を担っていると述べる。移民にとって NGO は、ホスト社会において生きる上で直面する様々な困難に対処することに関わり、移民の自立や自律、社会的・経済的流動性を促す役割を担っているという。さらに、NGO は単に移民をサポートするだけでなく、ブラジル在外公館などの公的機関が移民の実

情を把握し、対応策を検討する際にも不可欠な存在となっていることを指摘している。

Chapter 7 では、各章の論点をまとめるとともに、ブラジル移民を支援する NGO の役割を心理的適応および社会文化的適応双方の視点から検討し、アメリカでは移民が不法滞在であるが故に法的地位が脆弱であることに伴う困難に、日本ではホスト社会との社会的・文化的距離に起因する問題につながりうる様々な変数への対応に、NGO が同胞的慈愛のもとで有効な資源として機能することを指摘し、本論文の結論としている。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、1980 年代以降の時代におけるブラジル経済の否定的動向の結果として多くの同国民が海外へ労働移民として出国した事実を受け、主要な移住先である日本とアメリカにおけるブラジル移民の困難な生活実態に注目し、彼らに対する現地 NGO の役割について、移民のホスト社会への心理的適応と社会文化的適応という 2 つの適応側面から明らかにした研究である。移民のホスト社会への適応については、2 つの適応とそれらの適応に影響を与えるとされる変数を抽出する試みはすでに多くの先行研究においてみられる分析枠組みである。しかし著者は、本論文において日本とアメリカのブラジル移民という特定の文脈にその枠組みを適用し、在留資格、社会的・文化的知識、言語能力、差別、外国人嫌悪、文化的距離など、それぞれにおける中核的変数を浮かび上がらせるだけでなく、異なるホスト社会におけるブラジル移民の実情を適応と変数双方の観点から比較検討している点に、本論文の独創性を認めることができる。また、本論文を執筆するにあたり、著者は日本とアメリカにおいて延べ 3 年間に及ぶ実地調査（観察、インタビュー、資料収集）を行っている。その過程でコロナ禍という不測の事態に見舞われたため、ブラジル移民の声を収集することに制約が生じたものの、著者自身が日系ブラジル人であるという属性を生かして可能なかぎり収集した NGO やブラジル移民に関する一次データは、移民一般のあり方に関する今後の方向性を検討する上でも貴重であり、その資料的価値は高い。

心理的適応と社会文化的適応という 2 つの分析軸を移民の適応過程を理解するツールとして用いた本論文の分析は明解であるが、著者自身が指摘するように 2 つの適応は複雑に絡み合って存在するという現実を踏まえると、両者を統合する新たな分析概念を析出し、それを用いた考察を行うことによってさらに本論文の理論的枠組みに関する精緻化が実現できた可能性は否めない。本研究をさらに発展させるためにもその点に関する考察の深化を課題として指摘しておきたい。しかしその点を考慮しても、本論文はブラジル移民のホスト社会への適応と NGO との関係性に関する質的研究における一つの到達点として高く評価されるべきである。

2　最終試験

令和４年７月１９日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際公共政策）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。